

## 論文要旨

コスプレの文化と表現に関する制作研究 ～中国志怪古書『山海経』をモチーフとして～

岩手大学 大学院 総合科学研究科  
総合文化学専攻 アート発信プログラム  
馬 春燕 (バ シュンエン)

---

コスプレに関する芸術創作の考えをもっていた筆者は、日本がアニメ事業やコスプレが盛んな本場であることに大きな興味を抱いていた。そこで、2017 年の後期より岩手大学の研究生となり、日本においてコスプレの活動を継続し、その後進学した大学院において修了研究の研究課題とした。中国でもコスプレ活動に積極的に参加してきたが、日本での学生生活においても、岩手県内を含め、様々なコスプレ活動に参加したことで、両国のコスプレ文化の違いも見えてきた。日本では、コスプレがアニメの文化精神を示し、アニメ産業など多くの商業価値をもたらしており、今や日本を代表する文化の一つとなって、この国にさらなる魅力を与えている。

中国においても、ほとんどのコスプレ作品は日本のアニメやゲームなどに由来し、中国の青少年も日本のアニメの影響を受けており、これまでに筆者が扮した作品の中にも、自分でデザインしたキャラクターもあるが、もちろん、日本のゲームや漫画のキャラクターがある。

岩手大学地域課題解決プログラムの一環で、平成 29 年 12 月に遠野市現地視察に行ったが、その際に『遠野物語』に登場する日本の妖怪に関する知見を広めた。日本の妖怪のなかには中国に由来するものも多いのは周知の事実である。妖怪に対する態度には日中両国にはっきりとした違いがある。中国では妖怪文化を重要視せず、文化の主流からは締め出してきた。日本では、妖怪が親しまれてきており、専門の妖怪と称されるものまで登場しており、妖怪文化のアニメ化など、新興産業の発展も同時に推進されている。そうして、日本文化の独特の魅力が世界にアピールされてきたといえる。

現代において、人類はひたすら発展することに夢中になり、生活の質は消費によって定義されてしまっている。かつての人類の自然に対する畏怖の念は科学によって解消され、それまで人間の恐怖の形を代表していた妖怪は遠い昔の存在となってしまった。妖怪については、仏と対照的なものであり、仏が善の代表であれば妖怪は悪の代表といえる。一方で、人類は矛盾した極端な存在であり、善も悪もあり、仏と妖怪の両面をあわせ持つ。筆者はこれらを表現することで、双方が衝突しつづなした人類の文明を反省することにつなげたい。そこには日本的な要素も加え、仏教に由来する 7 つの苦しみ（生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦）をテーマとした。筆者は仏教の思想にも興味を持っており、日本の仏教も中国から伝えられたことを考慮すると、中国からの留学生として、中日文化をつなぐ共通点の一つであると考えている。

テーマ設定とともに、『山海経』に記載されている 5 つの妖怪を創作のキャラクターとして選んだ。西王母は生苦・死苦、乗黄は老苦、鰐鰐魚は病苦、鸞鳥は愛別離苦・怨憎会苦、狗鵝は求不得苦という、キャラクターとテーマとの連携を行った。

作品をただ美しいもので構成するのではなく、人類の歴史、そしてそれによって成り立つ現代

社会への批判と反省も取り込んで表現したい。したがって、作品に仏教的な思想を用いることで、自己を反省することに意義を見出している。深い文化的背景を持つ物語を取り込むことで、筆者独自のコスプレキャラクターを創造したいと考えている。筆者の表現したいものは、これまで犯してきた罪でもある「人間の弱さ」である。筆者はコスプレによる「悪」の宣教師となり、いい面しか見えていない世間に対して改めて我々の罪を伝えたい。

筆者は、修了論文の内容となる修了制作においてキャラクターデザイン、必要となる造形物の制作、そして撮影・画像処理（レタッチ）まで、限られた環境の中で、すべてを自分で仕上げた。自分の美意識で創造する芸術がそうであるように、コスプレの制作過程においても、キャラクターを模倣するだけでなく、自己を表現したいという欲求に応じることのできるものである。人々に伝える新しい芸術の表現方法として、また独特のコスプレ文化としての表現の可能性を探求することが課題であった。また、コスプレの表現において古代の文化についても表現として織り込むことによって、より魅力的な視覚文化として発信することもできると考えている。